

アトリエ 琉游舎 だより 138号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2022年8月24日発行

草いきれ 人死にをると

札の立つ 蕪村

- 夏の盛りは過ぎようとしています、生い茂る草の勢いはまだまだ止みそうもありません。真夏の熱気の中に香るむせかえるほどの草いきれは、草たちの呼吸、汗なのでしょう。
- 草いきれは草から発するムツとするような熱気です。草むらの中が外気に比して著しく高温多湿になっているため、これは葉の表面が直射日光で外気より高くなり、葉っぱから水分の蒸発が盛んになるために起こる現象です。熱中症にかからないように、私たちが体から汗として水分を蒸発させて体温調整をすることと同じ生命維持のメカニズムかもしれません。
- 草刈り直後の、あのかぐわしくも青臭い強烈な香りは、死に直面した草の最後の吐息なのでしょう。それは刈られた草たちの生と死の境界上にあるとの強烈な自己主張。夏の熱気と草いきれは生命力の横溢と盛りの後の終焉を、私たちにこれでもかと思わせつけてくれます。
- 草むらの中の草いきれの香りはその中に湿った空気を感じます。葉っぱからの水分の蒸散が草たちの呼吸だからなのでしょう。それは生きている証なのです。一方刈られた後の草むらからは乾いた臭いが立ちこめます。もはや葉っぱから水分を蒸発させることができなくなった草たちの屍の香り、と表現したらあまりに直截な表現でしょうか。青みを残す草も一日もたてば枯れ草のような灰色となり、干し草の香りを残していずれ土へと還っていきます。
- 「草いきれ 人死にをると 札の立つ」江戸時代の俳人、与謝蕪村の句です。江戸時代はまだ街道脇の草むらに行き倒れて死んだ人も多かったようです。「屍体あり、注意」と知らせる札を誰かが立てたのでしょうか。戦乱の時代だけでなく、平和な江戸時代も「死」は日常のあたり前の風景としてあったのでしょうか。人はその死を他人事ではなくいつも自分の身に引替えて観ていたはずです。ですからこの札は注意喚起ではなく、供養の札だったはず。そこには「南無妙法蓮華経」か「南無阿弥陀仏」と書かれていたことでしょう。
- 自然の生命力の象徴のような草いきれと、その中で行き倒れた「死」とのコントラスト。人も草も息も汗も、そして私たちの希望も絶望も喜怒哀楽もみんな、空と大地に還っていく。草いきれにあらゆる存在のいのちの循環を感じさせる秀句に出会うことのできた夏です。



彼岸会法要

9月24日(土)10時半から



読書会

5月から法華経を読んでいます。2回目の法華経読書会です。分かり易く楽しい会です。資料はすべてご用意いたします。皆さんの参加をお待ちしています。

8/30・9/13
(火)13時半

写経会

般若心経・自我偈・観音偈の写本9月4日(日)13時半を用意しています。初めての方もすぐにできます。

8月25日・9月1日・15日・22日・29日の映画会はお休みします

9/8
木

13時半

キリマンジャロの雪 (117分)

ヘミングウェイ原作。グレコリー・ペック主演。死を目の前にした小説家が愛と冒険に満ちた半生を回想する。ヘミングウェイの傑作作品の映画化。

私の山歩きは水と食料と合羽と熊除けの鈴があればその他の装備はあまり必要としません。天候が好転しないと分かれば山登りを途中で切り上げることや登山口からUターンして予約した温泉に直行することもあります。山中泊するような山行は初めから計画をせず、無理せずただひたすら歩き頂上でおにぎりを食べそしてまた降りる。この繰り返しです。眺望は天気次第なので景色を目的に登ることもありません。最近のTVの山番組やYou Tubeではいろいろな材料を持参して頂上で調理したり、花や鳥を観察する楽しみが盛んにレポートされていますが、私にはその様な楽しみ方は全くないのです。登り始めた後は、山頂はまだかまだかの思いが頭を駆け巡るか、逆に頭はすっかり空っぽになってただ足をひたすら前に運んでいるかのどちらかです。

楽しみといえるものに心当たりがあるとすれば、山頂で食べる昼食です。これは妻が早朝握ってくれた梅干しのおにぎり二個と胡瓜の塩漬けです。私はこれさえあれば満足です。卵焼きやプチトマトはおまけです。握り飯と漬物は、塩分と水分とエネルギーの3つの要素があれば生きものは活動が可能であることを教えてくれる食べ物です。登りですっかり消費した3要素を効率よく摂取すると後はもう下るだけ。よくよく考えてみれば、早起きして苦勞して山に登っておにぎりを食べてただ山を下りるだけの私の山歩きは、傍目からは何の楽しみも発見も無いように見えるはずです。確かにその通りで私は山頂におにぎりを食べに行っているだけです。雲で何も見えない時も、強風で飛ばされそうな時も、塩と水と米は体への最高のご馳走です。

登山がスポーツや趣味となるまでの頂上は信仰の場でした。そこは行者と神だけが存在することのできる所です。旅人や行商人はわざわざ山頂を目指す必要はありません。効率よくいくつかの峠を上り下りしながら目的地に向かいます。頂上を横目で見ながら人々は峠道を急いだのでしょう。山の頂上は生活や経済活動には無縁の地だったのです。今では、峠道はトンネルに取って代わられているところが多く、古道として草むらに埋もれてしまっているところがほとんどのようです。金精峠は栃木県日光市と群馬県片品村との境にある標高2kmを越える峠です。昭和40年完成の金精トンネルで、今では峠越えの道を辿ることは不可能になっています。私は金精峠を目指して登山道を上ったことがあります。場所によっては両手両足を使ってよじ登るような登山でした。かつての峠道はおそらく九十九折の道だったはずですが、それでも屏風のような峠に人は、向こう側にある何かに思いを馳せ、何かを実現できることを願ってこの峠に立ったのでしょう。

「峠」という文字は室町時代に日本で作られた国字（和製漢字）だそうです。国土のほとんどが山地で、山が人の言葉や生活や文化を隔てる境界となっていた日本の独特の地勢から生まれた漢字であることが頷けます。「山」を「上」り「下」る場所が「峠」です。二つ以上の文字を意味の上から組み合わせる新しい文字を作る「会意文字」のお手本のような字です。かつて峠はクニ境であり、その先は異郷の地でした。上り詰めて峠についてきたときに初めて向こう側の視界がぱっと開けます。これから異郷の地に足を踏み入れる期待と恐れに心が揺れるとき、ふと周りを見やると高い山の頂が見えます。その山の頂に自然と手を合わせてこれから向かう異郷の地での無事を祈ることは、日本人であれば当たり前ではないでしょうか。金精峠に登った時、私は目の前の男体山と眼下に広がる中禅寺湖の姿に、自然と手を合わせていました。

山そのものの存在が私たちの無事を守護してくれると信じることで、誰かに守られ導かれていると実感すること、それが大いなるもの、宇宙の真理との出会いと信じることで、それが信仰です。赤ちゃんはお母さんの眼差しに見守られていることを信じているからこそ、母の腕の中にすべてを預けて眠ることが出来るように、私たちは大いなるものに守られていると信じているからこそすべてを預けて日々を心安らかに生きていくことが出来るのです。いつの間にか人は信仰の原初を忘れてしまったのではないのでしょうか。私たちを見守る眼差し、その眼差しに抱かれて生きる日々を喜び感謝すること、その日々を信じることで出来る安心、これが信仰の原初です。人はそのような眼差しを受け取ったとき、自然と喜びと感謝の念が浮かび、気がつくとも眼差しに向って手を合わせているのです。誰に指示されるわけでもなく、何かと引替え取引するわけでもなく、無私、無心の私が私のために注がれた無量の慈悲をありのままに受け取ること、それが信ずることです。

信ずることから遙か遠くに来てしまった今ある宗教は、教義に忠実であることや教祖を崇めることが目的となってしまう、私たちの原初的な信仰をどこかに置き去りにしてしまったようです。もう一度私たちは信ずることの原点を取り戻さなければなりません。なぜ日本の山の頂上にはどの山にもほぼ例外なく祠が祀られているのでしょうか、山頂だけでなく湖の畔にも、道端にも、ビルの屋上にも、民家の庭にも、ありとあらゆる所に祠があるのでしょうか。そこは人が手を合わせたところです。手を合わせたところには、神がいると日本人は信じていたのです。それを古来日本人は「カミ」と称していました。「神、仏、大いなるもの、宇宙の真理、真如、実相、ありのまま」信仰者である私はその名称を問いません。何故なら信仰は私を見守る眼差しと私との間にだけ存在するものだからです。私には私の信仰が、あなたにはあなたの信仰があります。私には私のお釈迦様が、あなたにはあなたのお釈迦様がおのおのを見守ってくれているからなのです。

今年はまだ一度も山歩きに行くことができていません。酷暑と梅雨を繰り返す天候にタイミングを逸している、頻りに報道される熊との遭遇を恐れている、体力の衰えを自覚し始めた、などと理由理由は色々ですが、塩、水、米の三拍子揃った梅干し握りと塩漬け胡瓜の山頂極上ランチを今年はまだ味わえていません。そうこうしているうちに自家栽培の胡瓜はもう終了してしまいました。夏も終わりですね。